

受身意識からの脱却

通商産業大臣時代の論文。日本人の受身意識なし被害者意識に反省を求めるとともに、バランスの取れた配慮が必要であると力説する。

近頃、国会内外の論議には、腑におちないことが多い。その中でも、日本人にはどうも受身意識というか、一歩進んで被害者意識とでもいうべきものが、論議の軸にまわりついておるように思われてならない。このようなことでは日本人は遂に大国民になれないばかりか、健全な常識に支えられた、バランスのとれた国民生活を営むについての根本的な要件を外してしまうことになりはしないかと案じられる。

一昨年来、国際的な基軸通貨たるポンドの動揺と切下げ、更には慢性的な国際収支の赤字に悩むドル不安の高まりは、自由金市場における金価格の騰貴を招いた。そのため一九六八年の国際経済の前途は不安と動揺に曝され、世界貿易も従って萎縮しないまでも大きい拡大は覚束ないであろうということが一般的な見通しであった。政府の輸出入や国際収支の見通しも、従って、著しく控え目のものであり、国際収支に至っては三億五千万ドルという大幅の赤字を見込むほどであった。しかるに事實はそうした見通しを完全にくつがえし、輸出は予想以上に伸び、国際収支は逆に十二億ドルという大幅の黒字を記録した。それは、ドルポンド体制の弱体化が、ドルマルク、更にはドル円体制の強

化によつて補われ、世界の貿易も萎縮するどころか大幅の拡大を見るに至つた。被害者意識におびえていた日本が、実は自らの繁栄を持續しつつ、世界貿易の拡大をもたらす大きい原動力になつたのである。これは明らかに日本人の受身意識の過剰を示すものであつたように思う。

また戦前、世界貿易に占める日本の比重はせいぜい三パーセント内外であつたが、今日では優に六パーセントを超える盛況である。ところが日本人、その中でもエゴノミストといわれる人々までもが、世界貿易の伸びがこれ位期待されるであろうから、日本の貿易はこれ位の伸びであろうというような受身的な発想をするのが一般であり、しかもかような発想の仕方が誰も当然のことのように思つて怪しまない。これなども、どちらかといへば日本人の受身意識のもたらすものである。もっと露骨なもの拾えばいくらでもある。

例えば輸入や資本の自由化に対する日本人の反応の仕方である。自由化の扉を開けば外国の商品や資本がどつと這入つてきて、その秀れた技術力と資本力がまたたく間に日本の市場を支配し、日本の地場産業を押しつぶしてしまつたろうというのである。これなどは受身意識といわんよりは被害者意識とでもいふべきものであろう。ところが事実、これまで自由化してみてもそういう結果を招いた例を挙げてみると一段になると、即答に窮するというのが実際ではあるまいか。

なるほど資本力や技術力を欧米の同種産業と比較してみると、今尚著しい格差があることは事実である。だから一見そのような被害者意識をもつことも判らぬではない。しかし、日本人の組織力、経営力、労働の質の高さ、更には日本の立地条件や企業に対する労資の忠誠心というような要素は、数字で捕捉することこそできないが、日本企業にとって大きいプラスであることに間違ひはない。それよりも何よりも、日本の貿易が伸び、メイド・イン・ジャパンが世界の隅々にまで浸透してゐる事実

が、他国民と他国の企業に与えておる影響力はどんなものか、それに対応しての日本の姿勢はこれだよいかという評価と反省がどこまでなされておるかに思いを致すべきであるのに、そうしたバランスのとれ、またレシプロカルな配慮が意外に乏しいのは一体どうしたことであろうか。

この被害者意識は、独り対外面だけに見られる現象ではない。注意してみると国内においても至る処に見られる現象である。例えば近頃やかましい公害問題等がそれだと思ふ。産業の重化学工業化が進み、その投資が大型化して、有害な排出物が大量かつ集中的に出てくると、一般の住民はもとより、為政者や指導者までもが、公害の被害者意識の虜になり、経済や文化の高度化に対し、懐疑的になり感傷的になったりする人もあれば、企業を敵として無闇に感情的、戦闘的になる向も出てきた。それらは、かかる産業のもたらす物質的恩恵には直接間接浴しつつ、その受益面を棚に上げた不公平な公害論議のカテゴリーに属するものである。

われわれは、自らが一方において享受する生活の物質的基盤を正当に評価しつつ、他方において公害の防除や公害からの被害者の救済方策を冷静に考えるのが当然の道行きではなからうか。

このことは物価問題にも同様にいひ得ることである。生産や消費、更には輸出や財政等の経済活動の拡大に伴う所得の増大と消費の水準や内容の変化は、農産物、中小企業物資、サービスマテリアル等の生産性部門の価格の上昇を招いた。いわば物価の上昇は、経済の成長と完全雇用の代償ともいふべきものである。経済の成長と完全雇用の恵沢を自ら享受しつつ、それを棚上げして物価の上昇のみに対し被害者意識を丸出しにするのも、どう見ても不公平なように思われてならない。他にも拾えばいくらでもあるが、凡ての問題に対し、バランスの取れた評価を加えつつ、大国民として内外の諸問題に賢明に取り組みたいものである。

組織とモラル

通商産業大臣時代のエッセイ。日本の役人のモラルが比較的高いことを喜ぶとともに、モラルの確立があれば組織が隆昌すると説く。

先般日本を訪れたアジアの某国の要人が私にこんなことを言われた。「日本の今日の経済的躍進には色々の原因が考えられますが、最も根本的な原動力は、何といても、日本の公務員のしつかりしたモラルであるように思う。日本の役人衆は乏しい処遇の中にあつて、与えられた仕事に真正面から熱心に取組んでおります。これこそが日本の宝であるように思います。その点、私の国のことを省みると、暗い絶望感に駆られるのであります」と。

日本においては、お役人衆は必ずしも評判がよくない。また大勢の中には不心得者があつて、汚職でマスコミのやり玉にあげられたり、司直の手にかかる者もある。しかし、考えてみれば人間社会の歴史において洋の東西を問わず、汚職が絶えたことはかつてなかった。問題は、そういうことが社会の隅にかくれてしまつて、いつまでも明るみに出ないということでは困るのであつて、それらが何れは摘発され、所定の手続で処断されるということこそが、実は大切なことである。

また日本の役人のモラルが、他の国々のそれに比べてしつかりしておるかどうかということも同時に大切なことである。その点からみて、私は、私を訪ねた某国要人の評価を少々面映ゆい面がないでもないが、嬉しく思うものである。事実、私が産業界政府の長として、その幹部諸君とつき合つて受ける感じは、率直に言つて「質素の中における威厳」とでもいうべきものである。時には或種の尊敬とベールを混えたような感懐にうつたれることがある。

しかし、このモラルの問題は、独り役所だけの問題ではない。会社や銀行、組合や団体、その他あらゆる組織体の興廃にからむ問題である。モラルが確立していない組織は、偶々客観情勢に恵まれて、隆昌に赴くことはあるが、それは、あくまでもみせかけのものであつて、本物ではない。風雪の試練に出遭つて、もろくも潰え去るものである。逆に時運に恵まれず、一向に発展の緒につかないばかりか、いつまでも荆棘の道が続いておるよつに見える組織であつても、そこにモラルの確立があれば、その組織は、いつの日か春の日を迎えることができるものよつである。

そのことは、組織についてのみならず、組織内における個にとつても同様にいえることである。自らの組織に対する倦むことを知らない献身、その組織の名譽と信用を自らが支えておるといふ責任感、そうしたものは世にも美しい徳である。そして、そうした自覚に基いた実践が、かかる自覚をもつた個そのものの犯し難い威厳を形造るものである。更にその個の威厳と信用を通して、その組織の威厳と信用を、その組織を包む国家と社会の威厳と声望を高めるものである。私は諸君にそうした個であつてほしいと希求する。

日本を住みよく美しくしよう

第一回目の自民党総裁選に出馬した頃のエッセイ。のちに大平政策研究会の主要テーマとなった田園都市構想の萌芽が見られて注目される。

大都會の中心を貫いて流れる川があり、その川面を見おろす橋の上立って見たとする。かつては、この川にもいせいのよい小魚が泳ぎ、子供たちが嬉々として漁りにたわむれていたにちがいないという回想が還ってくる。ところが今ではドス黒い濁水が重ったるく流れ、その周辺には太陽をさえぎる煤煙が、吹き払うことのできぬ鉛のカーテンのようにたれこめているのを見て、暗然とするにちがいない。それでも毎年正月になると、少なくとも数日間、工場は一斉に操業をやめる。すると空気は澄みわたり、廃液ににごった川の水もいくらかはその透明度をとりもどす。汚れの少なくなった川には、河口のハゼがのぼってくる。

人は自然を破壊しつつあるが、自然は、機会さえあれば自らをとりもどしたがっているのだ。自然のもつこの玄妙な復元力と四季の自然に結びついた人間的連帯は、どうしてもとりもどさなければならぬ。

人口の都市集中によって、見放された僻地や農村の一部には、渴いた社会から捨てられようとしている老人たちが孤独の生活を営んでおる。スウェーデンにおいても、大都市の多くの老人たちが孤独の中で淋しく死んでいくという。この集中と過疎のアンバランス、自然を巡る人と人との断絶は、何

としても解決しなければならない。自然を死滅させてしまふ前に、自然の復元力をとりもどさなければならぬ。人間の生命力を奪ってしまう前に、人間の働く意欲を温かい自然の中で十分生かさなければならぬ。

前世紀の終りに、英国人のイベニーザー・ハワードは、大都市に対する人口の集中化傾向を憂いて、「ガーデン・シティー」の構想を打ちだした。適切な人口とこれに見合う雇用機会を持つ都市を、緑と太陽と水に恵まれた農村が取りまくという構想である。この考え方は、のちの英国の都市政策の根本となった。だが、英国においても都市周辺の環境の変化はいちじるしく、折角のニュータウンは単なるベッドタウン化してしまつた。公害や交通の混雑は、ベッドタウンの生活環境を大きく阻害しはじめた。わが国はいま、「ガーデン・シティー」(田園都市)を最も必要としている。われわれが英国の反省の上に立つならば、今後創り出さねばならぬものは、たんなるベッドタウンではない。独立した都市機能を営む適正規模の田園都市でなければならぬ。むろん、それには、それにふさわしい物的条件が必要となる。日本の経済力は、それに必要とする物的条件を十分充足できる筈だ。

しかし、それ以上に自然の復元力と人間の働く意欲を十分生かす都市住民の精神的基盤が必要である。昨今、都市計画や国土改造計画に関する論議がさかんである。けれども、これらの論議が、人々の精神の問題をぬきにして論じられる限り、その充実した達成は覚束なかつた。

この二、三年、戦後新しく生まれたいくつかの新都市においても、夏祭や秋祭の旧い行事が行われるようになった。旧い日本の文化が、生産の喜びと個性の尊重を軸とした人間的連帯感の上に実つたものであるならば、このような傾向はこれからの地域社会の形成に一つの方角を示すものといえよう。

平和の中の秩序の創建

通商産業大臣を辞任した無役時代、日本青年会議所の二十周年記念誌に寄稿した論文。平和を単に反戦と捉える論議の不十分さを指摘し、平和の中の秩序の創建はむづかしい課題であると主張。

日本青年会議所は、戦後たゆみない苦闘と前進を通じて、今や、清潔で弾力性のある若い英知とエネルギーを吸収したユニークな組織体に成長した。そして日本社会の各分野において、清新にして建設的な大きい役割を果しつつある。一方において、これまでの淀んだマンネリズムに抵抗しつつ、他方において観念的な革新の乱舞や空転をしりぞけて、日本の青年の真の道標を追究してきた。その貴い実践と試練を通じて、問題は次々に発掘され、対応すべき方策も、漸次明かとなりつつあるようである。そこで私は、日本青年会議所の二十周年の記念に当り、一つの視点　それは未だ十分彫琢が加えられていない未熟なものであるが　を提示して、会員各位の一層の思索を促したいと思う。それは一口に言えば、「平和の中の秩序の創造」という課題である。

私は近頃、当面の政治課題や経済の問題について考える場合に、これまでの知識や経験が漸次、無力化しつつあるのではないかという漠たる不安に駆られることがある。従来知識や経験を以ってし

ては当面の課題に対する十分な解釈や説明もできないかということだけであれば、問題はそれ程厄介でないのかも知れない。しかし従来の知識や経験の中からは適切な対応策がでてこないということになる、問題は余程深刻になってくるように思つのである。

事実、従来の知識や経験が無力化しつつあるとすれば、一体それはどういうところに根因があるのであろうか。それには勿論多くの原因が考えられるであろうが、少なくともその禍根の最大のものはどうも「平和」ということについて、われわれが、その本体を十分理解していないところにあるように思われてならないのである。

大胆に言わせて頂くとするれば、これまでの人類の歴史は、本来の意味における平和を経験していなかったといえないだろうか。換言すれば、人類は、戦争の準備とその遂行、その跡始末と復興、更に次の戦争の準備という一連の過程を間断なく辿ってきたといえないだろうか。つまりこれまでの歴史は戦争と武將の歴史であり、これまでの政治は、その一連の戦争に対する奉仕というか潤滑油のようなものであり、これまでの経済も戦争に奉仕する欠乏の経済であった。文学や芸術もまた戦争状況の描写や戦争に対する陶醉乃至は抵抗というものであったような気がしてならないのである。

勿論、永續する平和とか恒久の平和ということが繰返し主張されてきた。しかしそれは戦火の中で、或いは戦禍を眼の当りに見て、更には、戦争に因る重い犠牲の下に、たまりかねた人類の叫びであった。しかもそれは実現できない果敢ない理想であり、遂には見果てぬ夢であったといえよう。また平和主義、平和運動、平和憲法等という言葉が、或種の内容乃至は実感を伴うものとして語られてきておるが、そこにいうところの平和というのは「反戦」ということ以上に積極的な内容を持つてはいなかった。

ところが、第二次世界大戦後、事態は大きく変りつつある。核兵器の出現は、たしかに最大の変革であった。人は核兵器のことを最終兵器と呼び、核兵器が使われる状況は、最早勝負を争う従来の戦争ではなく、これに参加する交戦国ばかりではなく、地球という星を破壊に陥れることになりかねない。勿論、核兵器の開発は攻撃面ばかりでなく防禦面でも進んでおる。また通常兵器や通常戦争が全然なくなった訳でもない。しかし、核兵器の出現が歴史を大きく変えつつあり、最早大きい戦争はできなくなりつつあることは誰も否定できない事実のようである。

一方、世界政治の場面において、軍事力は政治力や知識力等に往年の王座を譲り、今ではせいぜい補完的な地位を保つに過ぎない状況になりつつある。キューバやベトナムを巡る事態は、否応なしに、われわれにそのことを教えている。同様な消息は、領土の評価にも見られる。例えば十九世紀から今世紀にかけての植民地の争奪戦は、今から見れば政治的に見ても経済的にも割り合わないものになってきた。なるほど領土の保全意識は依然強いが、その拡大について期待できる利益と払うべき対価とは明らかにバランスがとれるものではない。戦争の大きい原因の一つは、かくして除かれようとしておる。

その他、挙げれば他にも多くの変革の要因は見られようが、歴史が新しい段階に踏み込んできたことだけは明らかかなようである。そしてこの新しい時代の最大の特長は、これまで経験したことのない「平和」の状態をどう理解し、その中でどうして秩序を創建するかということになってきたように思う。即ち戦争は戦争目的即ち戦勝のために必要とする秩序を要求し、それなりにそれを実現してきた。ところがこれからの秩序は、平和の中の秩序である。平和が支える目的は著しく多様である。その中で秩序の創建である。それは極めてむづかしい仕事で、われわれがこれまで慣熟してきた手口では手

に負えない厄介な課題であると言わなければなるまい。一方戦争は、それ自体大きい物質と労力の需用と消耗を創造して経済に介入し、戦争目的に相応しい経済の均衡水準を維持してきた。ところがこれからは、戦争のもたらした大きい需用は期待できない反面、生産力の系列は技術革新の波に乗って、日々増強されておるのである。経済は新しい豊かさの高い水準の下で、その均衡をどうして維持するかがわれわれのこれからの課題になってくるのである。

また、戦争は緊張した勤労を要求するので、それ自体がそれなりの秩序を形成するのに役立つものである。ところが、平和は緊張よりも解放感を伴うもので、平和の中の秩序の維持こそは果しなく骨の折れる政治の課題になってくる。今日緊張の呼んでおる物価、公害、土地、交通等の諸問題も、戦中又は戦前戦後においては、大きい問題にならなかつた。またそれらを組織的に問題として取り上げる余裕もなかつたのである。ところが平和の中にあつては、これらの問題をそのまま何等の留保なく持ち出すことになるし、またその組織的な解決を計る余裕を持つことにもなつてきたのである。

経済問題としても、戦争に因る需要に代替するものとして、われわれは例えば公害、その他環境改善に因る需要を組織的に創り出し、技術革新の波に乗つた生産力の急激な増強とのバランスをとる一助としなければならなくなつた。つまり欠乏の中の経済秩序から豊かさの中での経済秩序を創造することを考えなければならなくなつた。土地の問題も交通の問題も、これまでは臨床的な局地的な対処策しかなかつたし、またそれだけの余裕しかなかつたが、これからは全国土の均衡ある開発と技術のシステム化を通じて解決するという手法にvarietyがあるし、その余裕も出てきた。

列举すれば際限がないが、この種の新しい課題は凡て平和の内容や秩序の問題として捉えるべき新しい、骨の折れる問題に他ならない。だからこれまでのように平和を単に反戦という戦争と平和の接

点で捉えて論議するだけでは、問題の把握が十分でない許りが、その対処策も遂に混迷と不毛に終るおそれがある。私は近頃、平和の建設、平和の創造、換言すれば平和の内容の充実というようなことを、政治や経済の問題としても、文化や教育の問題としても、深く考えて行くべきであると思つておる。日本青年会議所の各位も、かような視点に立つて夫々の立場で苦吟されておるにちがいないと思つたが、尚一層のご奮発を願つて己まない。

(昭、四五・九)